

<実践報告>

2年2組22名の児童と保護者と教師の協働による

「学級づくり」の事例研究

新井 清規 長野市立東条小学校
土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

キーワード 長野市立東条小学校2年2組22名 学級づくり 回転寿司

1. はじめに

『小学校学習指導要領解説 特別活動編』の中で指導内容や活動の取り扱いについて、「学級活動において充実した活動が展開されるためには、その土台となる日々の学級経営が必要である。特に、教師と児童の間に信頼関係が成り立っていないと、児童が安心して自らよりよい生活をつくっていかうとする自主的な活動には取り組むことができないし、児童の生活づくりへの意欲を高めるなどの指導が効果的に行えないのは当然である。児童一人一人が自らの希望や目標に向かって意欲的に活動しようとする態度の育成には、教師の共感的な児童理解と強い信頼関係が基盤となっていることを忘れてはならない」¹⁾とある。

筆者が学級経営において心がけていることのひとつは、子どもたちの居場所作りである。居場所作りといっても様々なものがあるが、特に居場所作りのためのコミュニケーションに力を入れている。具体的には、連絡帳での朱を通しての会話（子どもを認める）、日常的会話、授業でのコミュニケーションなどである。その中で、子どもたちと筆者との信頼関係を築いていきたいという強い願いのもとに学級経営を行っている。

また、週1回であるが、学級内の児童の様子、筆者の気持ちを伝える学級通信を発行し続けている。この中で、子どもたちの様子等を具体的に家庭に報告している。

最近では、不登校、いじめなど学級内での異変が起きているといわれている。様々な要因が考えられるが、ひとつには学級経営上の問題があるのではないかと筆者は考えている。学級の中での、子どもたち一人ひとりの「居場所」が変化していく中で、「居場所」がなくなってきた時に学級内の異変が起きるとも推察できる。学級担任による様々な学級経営の実践が展開され報告されている。

本稿では、学級内での居場所作りを中心に置きながら、児童、教師そして保護者との協働による「学級づくり」の実践を報告する。

2. 子どもの中から生まれてきた「あるテレビ番組にクラスで出たい」

筆者は、東条小学校に赴任してから、①学校全体としてのホタルを守り・育てる活動、②生活科での子どもたちとの地域探険を兼ねながらの学区内で棲息しているオオムラサキの生息地を訪れたり、オオムラサキの研究者である横浜国立大学の特任教授北村文治先生をお招きし、教室で授業を行っていただいたりした。③図工、生活科の合科として、ペットボトルを用いての船造りを行うなどクラス全体への所属感を意識した学級活動を大事にしてきた。その過程の中で、子どもたちの中にはクラスの中での、“ぼく・わたし”という所属感が生まれてきていると考えていた。しかしながら、これらは学校の教育課程に合わせたのいわば、教師側が意図した活動であるということも否めない活動であった。

（１）「先生、仮装大賞、みんなでやろうよ」

仮装大賞²⁾ という番組がある。この番組に子どもたちの間からクラスで出場したいという意見が出てきた。筆者としては出場の可否には大いに悩んだ。はっきり言ってしまえば、学校の教育課程にはないものである。しかし、筆者は、子どもたちからの声を大事にしたかった。

筆者としては、仮装大賞に参加することが、全員参加という前提のもとですすめられ、それに向かって活動していくならば、子どもたち一人ひとりの居場所が生まれ、全員で同じ目標に向かうことができると考えた。そして、全員が同じ目標、そして同じステージに上がれるという点で全員が満足感をもてると考えた。全員で同じステージに上がりたい、そして同じステージの上で子どもたち一人ひとりに役割分担があるという点で、筆者は、あえて特別活動における「学級づくり」の一環として「仮装大賞」に取り組むことを決断した。そして、この「仮装大賞」を通して、子どもたちと保護者が更に一体になれる「学級づくり」ができると考えた。しかし、取り組んでいく中では様々な問題点が生まれてきた。

（２）取り組んでいく中での諸問題

①アイデアが浮かばない

子どもたちが仮装大賞に出たいということで、それに向けてのクラス全体の気持ちを高めていったのであるが、肝心のアイデアが出ないという難問にぶつかった。子どもたちともアイデアをつめたが、全員参加という前提で企画した以上、何人かが出て、あと残りは応援、という形にはしたくなかった。そのようなアイデアが子どもたちから出されても筆者は認めなかった。そこで、保護者に事情を話し、アイデアは保護者から夏休みを利用して募ることにした。保護者からは「むずかしい」「いいものが思いつかない」などの声が多かった。悩んだ末、少しでも子どもたちの夢を叶え前向きに考えたいと思いアイデアをテレビ局に送り、テレビ局と相談するという形を取らせてもらった。出てきたものを調整しながらテレビ局に送り、助言を元に再構成していくという方法である。ただし、テレビ局と調整といっても、確実に本選に出られるということではないということを確認しながら進めていった。テレビ局はあくまでも助言という立場をとり、最終構成は保護者のアイデアをもとに筆者が再構成した。

②練習時間がない

本校には音楽会があり、その音楽会が県予選の1週間前であった。小学2年生ということもあり、音楽会と仮装大賞の両方に並行して取り組むことは子どもたちにとって負担が大き過ぎる、と判断した。そこで、音楽会までは音楽会に集中して進めていくことにした。

県予選の1週間前での練習では、子どもたちにイメージ作りをしていくのが精一杯であった。

③時間のないまま地区予選へ

このような中で、長野県予選に出場することになった。練習時間はない、うまく動きがとれない、セットもないという状況の中での出場であったため、筆者としては、正直ここまでで終わってしまうということも覚悟していた。子どもたちも、初めての県予選、今まで見てきた保護者ではない審査員のの人に見てもらおうということで緊張が高まっていた。

しかし、結果としては、予選仮通過、そしてセット、動きもいいものにして再度ビデオで挑戦をしてください、という結果になった。

(3) 長野県予選までの筆者としての考察

「仮装大賞にでたい」という子どもたちの声を大切にしたい、可能性があるならと動き出した予選であった。わずか1週間しかない中での練習、イメージ作りに重点を置くなかで、非常に熱心に取り組んでいる様子があった。動きを確認していく中「先生、こういう動きがいいんじゃない、こういう風にすれば・・・」という子どもたちからの意見も出てきた。また、筆者としてもそのような意見をどんどん取り入れ、自分たちの演技ということを大事にした。

そのような中で、子どもたちにとっても“ぼくたち、わたしたちのクラス”という意識が高まっていくことを実感することができた。

諸問題についても、ことある毎に保護者に相談した。アイディアに関しても「子どもたちが難しいなら、保護者で考えられるものを考えていきます」という意見のもとに保護者会を保護者が自主的に開き、考え合ったということの後から聞いた。保護者の陰での支えに感謝すると共に、「学級づくり」の基盤に保護者の力が大きく関与していることを感じることもできた。

3. 本選に向けての協働作業

(1) 本選に向けての準備

予選仮通過ということもあり、若干の時間的な余裕も生まれた。そこで、今までできなかったことを再検討しながら、本選への望みをかけることになった。練習わずか1週間という中での予選通過ということに関しては、子どもたち、保護者ともに非常に喜んでいる様子うかがわれた。そして、すぐさま学級懇談会を開き、保護者に今後の予定等を話し、今後に向けての確認をしあった。

筆者として感じたことは、保護者は非常に協力的であったということである。「そんなものに出るなんて・・・」と一笑されてもおかしくはなかったが、保護者からは「子ども

たちががんばるんだったら、私たちも」という声が上がった。すぐさま、衣装の件、セットの件について保護者との打ち合わせが始まった。

①練習時間の確保に向けて

練習時間の確保が大きな問題となった。そこで、保護者の協力のもと、夕方7時から1時間半程度の練習時間の確保ができた。それぞれの家庭の予定もあることから、強制ではなく、できるだけ全員参加の練習とし、この中で子どもたちとの練習を進めていった。しかしながら、毎日の練習で子どもたちの表情にも疲れがでてきていた。毎日1時間半の練習時間もだんだんと短くし、子どもたちの様子を見ながら、30分という時間の中で集中して進めていくことにした。

②セット・衣装は保護者の方に

セットは休日を利用して保護者に作っていただいたり、大がかりなものは保護者の中に大工さんがいる関係もあり、その方をお願いした。また、子どもたちの衣装に関しては、パーツ毎に分け保護者の分担で作成していくこととした。保護者も「子どもたちのためなら」と快く引き受けてくださった。主に土、日の作業であったが、不満を言わずに保護者は手伝ってくれた。小さいお子さんがいて学校に出てこられないある保護者は「家で、できることは家でやりますので、どんどん分担してください」といってくださった。また、ある保護者は「いろいろな言い方をするけど、こんな風に親と子、先生が一緒になって何かするのが、開かれた学校っていうんじゃないか」と言っていた。その言葉が筆者にはとても印象に残った。

③結果は不合格

保護者、子ども、教師が協働し進めてきた子どもたちとの練習、セット・衣装の完成等ができ、指定された日までにクラスの演技をビデオに撮り、テレビ局に送り、最終審査を待った。しかし、最終審査で不合格になった。保護者には連絡網により結果を伝えた。

「先生、お母さんががんばっていたのに泣いていたよ。私も泣いちゃった」次の日学校にきた女子がそういていた。

(2) 協働した「ものづくり」から感じたこと

最終審査では、不合格という結果になってしまったが、地区予選から最終審査の1ヶ月半の期間は、保護者、子ども、筆者との3者がまさに協働しての「ものづくり」をする期間であった。衣装、セット等どれをとっても子どもたちだけで、または筆者だけで作り上げるのは不可能であった。子ども、筆者にとって不可能な部分を保護者がお互いをフォローしながら進めていったことは、筆者として非常に頭が下がる思いであり、子どもたちにとっても「自分たちのために、たくさんの人ががんばっている」ということを意識する重要な場面になった。

(3) 教師として、子どもたちへ

不合格ということを聞いて、筆者は次の日に以下のような学級通信を発行した。

「子どもたちは、この回転ずしの練習を通して、クラスで何かをやるということにとっても燃えていました。新井も、この2年2組22名で、この子どもたちと何かをしていきたい、という思いがありました。子どもたちも、クラスで何かをしたい、という思いがありました。2年2組の子どもたちだからこそ、このような、「仮装大賞」の本選まであと一歩までいけたのだと感じています。子どもたちは本当によく頑張りました。夜の練習でも、眠いのをこらえながら、がんばっている姿がありました。子どもたちは、とてもよく頑張ったと感じています。この頑張りはこれからの成長にとって絶対役に立つと感じています。

新井のこれまでの様々な学校での体験活動において、ここまで子どもたちががんばった、という経験は初めてでした。中学校では、部活や生徒会でがんばるということがありますが、クラスで何かをがんばるということは、クラスマッチ等のいくつかの行事であることが多いです。その分、この「仮装大賞」の本選までの経験は、子どもたちにとっても、新井にとってもいい経験になりました。子どもたちにとっても、新井にとっても、もしかしたら、クラスで何かを、という経験はもう数えるくらいしかないかもしれません。それくらい、2年2組22名の子どもたちと貴重な経験をさせてもらいました。そして、貴重な時間を過ごさせてもらいました。

やはり、振り返ると2年2組の子どもたちだからこそ、子どもたちもがんばれたんだなあ、と感じます。最高の子どもたちです。日に日に子どもたち同士の連携、まとまりがよくなっていくのを感じました。子どもたちの成長を感じることもたくさんありました。素晴らしい子どもたちだと感じました。

保護者の皆様にもたくさんのお力を頂きました。セットや衣装など大変ななか用意をしてくださったり、さまざまなお力をお貸ししていただきました。新井の目の届かない範囲で様々な準備等を進めてくださった保護者の方もいらっしゃいました。本当にありがとうございました。また、多々ご迷惑をおかけした保護者の方もおられるかもしれません。ご理解とご協力ありがとうございました。

本選まではいけませんでした、が、「合格!」といって、メダルを子どもたち一人ひとりにあげたい気分でもあります。

いろいろとありがとうございました。「仮装大賞」本選に向かったの2年2組22名としての最初で最後の経験になりましたが、子どもたちととてもいい時間、とてもいい体験活動をさせることができました。ありがとうございました。最高の子どもたちと活動することができました。いい時間を過ごさせてもらいました。」

(学級通信「いっばいっば」第34号 平成20年12月2日)

(4) 保護者からの声

本校で保護者間のコミュニケーションのため、保護者間で「まなざし」という1冊のノート回している。その中で、保護者はこの「仮装大賞」への活動の取り組みを通して以下のように述べている。(抜粋)

「いつもお世話様です。仮装大賞結果とても残念でしたね。子どもたちがあそこまでがんばっていたので、とても残念です。2年2組22名で仮装にでましよう→書類審査→長野予選仮通過とすすむ中で、私の頭の中は“ピッ、ピッ、ピッ、ごうかくー！”ヤッターと最後の感動の場面ばかり考えていました。テレビで見ている時に合格して涙する子どもたちと一緒に泣きながら見ていて、何かを一生懸命やり遂げて仲間と喜び合えるそんな感動を自分の子にも経験してもらいたいなあなんて思っていました。なので、もしかしたら、本当に出場できる！？という時は子ども以上に、私もうれしかったのですが……。本当にがんばっていた子どもたち“合格”させてあげたかったです。「いっばいっば」に新井先生がここまで子どもたちががんばったという経験は初めてでした、とありました。結果は残念でしたが、今回子どもも親もとても貴重な体験をすることができ、感謝しております。子どもたちも成長したんじゃないかなと思います。私にとって準備する中で、お母さんと一緒に何かを一生懸命やるということを久々に経験できたこと、とてもよかったと感じています。」

「仮装大賞、本当に残念でした。練習を重ねる毎に上達するとともにクラスのまとまりができて、みな一生懸命でしたね。ひとつの夢……目標に向かって2組がひとつになれたと思いました。保護者の方は大変だったと思います。でも。親は子どものサポート役ですよ。子どもがやりたいこと、がんばっていることに、手を貸してあげるものではないかと。親が大変だから、やらせないという話を聞くことが多いです。自分自身ではなく、子どもの気持ちを大切にしたいと思います。」

「仮装大賞の結果はとても残念でした。しかし、この経験から得られたものはとても大きかったです。子どもたちも保護者も1つのことに懸命に取り組めたということが大きな収穫であったと思います。子どもも私も貴重な体験ができ、感謝しております。」

「仮装を通して、みんなで1つの目標を持ってがんばった2組での団結力！3年生でクラス替えになってしまうのはもったいないような気がします。今回残念な結果になってしまった仮装ですが、ここまでこれたのはやっぱり2組だったからこそ。親も子もなかなかできないいい経験をさせてもらったように思います。」

保護者のコメントにもあるように「何かを一生懸命やり遂げて、仲間と喜び合える、そんな経験を自分の子にも経験してもらいたい」「何かを一生懸命やるということを久々に経験できた」「親は、子どものサポート役」等、保護者としての一体感、そして子どもをサポートしていくという姿勢には「学級づくり」への支えを感じるときでもあった。

また、子どもの気持ちを大切にしたいと思います、という言葉は筆者としても大きな励ましになった。

4. 恥ずかしいんじゃない、自信を持って全校のみんなへ

今まで保護者、子どもたちと協働して進めてきた「ものづくり」であったため、ここで終わりにしたくはなかった。不合格で恥ずかしい、ではなく、がんばってきたからその成

果を全校のみんなに知らせたいと筆者は考えた。

また、その紹介の仕方でも職員会等で「仮装大賞をやりますので、見に来てください」という担任からの連絡だけでは、みんなで作り上げてきたという気持ちが崩れてしまうような気がしていた。学級のまとまりが生まれてきていたので、子どもたちの声で伝えたいと感じていた。

そこで、子どもたちと相談し、各クラス、各先生へ子どもたち自身で招待状を書くことにした。以下は、その時の学級通信の抜粋である。

「本審査の結果が来た次の日、子どもたちはさすがにやや落ち込み気味でした。子どもたちには、本審査の状況を話すとともに「ここまでがんばった演技を全校のみんなにも見てもらおうよ!」と投げかけると子どもたちは「がんばったんだから、見てもらおうよ!」「見てもらうからには招待状を先生書こうよ!」という感じに、自分たちのがんばった姿をみんなに見てもらいたい!という気持ちになりました。そして、各先生、各クラスあてに子どもたちの分担を決め招待状を書きました。その日の給食時間はいつもより少し短めにし、昼休みに招待状をそれぞれに配ることにしました。配る時間になると子どもたちは「先生行ってくるね」とばかりに、それぞれの分担の先生やクラスへ……。教室から出て行く子どもたちの後ろ姿に言葉にうまく表せませんが、大きな大きな成長を感じました。

「〇〇先生絶対見に来てくれるっていついていたよ」「〇年〇組は全員来てくれるって!」と喜びながら教室に戻ってくる子どもたちも。先生が見つからなくて学校中を走りながら、「〇〇先生どこにもいないんだけど……」といいながら戻ってくる子どももいました。その日に渡せなくて、次の日職員室で招待状を渡している子どももいました。ある先生は「2年2組っていいね。子どもたち生き生きしているよね」と話してくれました。」

(学級通信「いっぱいぽ」35号 平成20年12月8日)

そして、3日間の2時間目の休み時間という限定であったが全校に発表した。

子どもたちの励みにしたいという思いから、筆者は見に来ていただいた他のクラスの先生方や子どもにその時の感想をお願いした。以下のような感想を頂き、筆者は2年2組22名の子どもたちの前で、それぞれの感想を読み上げた。

「楽しく見させてもらいました。ゴロゴロ転がる人の上をお皿にのったお寿司が運ばれていくのは、とってもおもしろいアイデアでした。じょうずに転がらないとお皿が止まってしまうのをみんな協力してうまく助け合っていたと思います。お寿司屋さんの雰囲気も出ていてとてもよかったと思います。みんな一生懸命でえらかったと思います。ありがとうございました。」

「クラスが一つになるいい活動としてすばらしいことだと思いました。保護者と協力できるってすごくいいですね。」

感想を聞きながら、子どもたちは「2年2組22名だから、こういう事ができるんだよ」

とある子どもがつぶやいていた。その言葉が印象に残った。

また、子どもたちにとって、招待状作りも、「ぼくたち、わたしたちのクラス」につながる土台になったと考えられる。その中では、子どもたちの自主性、責任感を発揮することができたと子どもたちから感じた。

（４）これからをどうする

全校のみんなにクラスのことを紹介していったことで子どもたちは、大きな自信をつけていくことになった。そして、全校のみんなからの大きな後押しもあり、子どもたちはここまで来たんだからもう一回挑戦をしていきたいという気持ちになっていた。

そこで「これからについて」の学級懇談会を開いた。保護者の中からは「一度落ちているからもう恥ずかしい思いはさせたくない」という意見や「子どもたちの意見を大事にして、子どもたちがやりたいということなら、親は応援すべきだ」等の意見が出された。最終的には、「先生、子どもたちの仮装大賞にでたいという気持ちを大事にしていこう」ということで話し合いが終わった。そして、保護者の力を借りながら、子どもたちも練習をし、再チャレンジとして2月の予選に挑戦をした。最終的には子どもたちの念願が叶い、4月にテレビ番組に出演を果たすことができた。

子どもたちは3学期に作成した学級文集に以下のように述べている。（抜粋。ただし、ひらがなの部分は字数の関係もあり、筆者が漢字に直してある）。

「欽ちゃんの「仮装大賞」に出場するために、クラスの出し物の、回転寿司を練習しました。11月毎日練習をしました。最初は回るのが揃ってできませんでした。何度も練習していくうちに、みんなで揃ってできるようになりました。レーン役の僕は、背中にお寿司役の友だちをのせて回るのが重くて大変でした。前の友だちについて行くのがやっとでした。でも、練習を続けるうちに、揃ってできるようになりました」

欽ちゃんに会えると思っていただけ、予選で落ちてしまいました。とても残念でした。全校のみんなに見てもらって笑ってもらい、うれしかった。2月から再挑戦します。4月にクラス替えがあって今のクラスと離ればなれになってしまうけど、今度は欽ちゃんに会えるようにがんばりたいです。

そのために出場できるように力を合わせて回転寿司を仕上げるようにがんばりたいと思います。」

「欽ちゃんの仮装大賞で、はじめ段ボールをまいたとききつくて、あんまり回れなくて段ボールもとれそうになって、とうとうやぶれちゃって直すのが大変だった。それから、回転寿司で回るのが最初難しかったけど、でもどんどん上手になってきたからすごいと思った。予選会場には他の学校の人がおそろいのTシャツをきて、セットもすごく僕たちの回転寿司はダメだと思った。でも、予選通過できてすごいと思ったら、最後の審査で通過できなくて、ぼくもくやししいし、お母さんもくやししいといっていた。もっと練習してお寿司が落ちないようにしたり、もっと面白くしたいと思った。みんなの前で回転寿司を見せたとき、「すごかったよ」「おもしろかったよ」といってもらったり、拍手をもらえてすごく

うれしかった。今度こそ、本気でやって絶対東京へ行きたい。がんばるぞー」

「はじめ、回ったり、線からでたりしちゃったけどいっぱい練習したら、止まったり線からでないようになって、本審査まで行きました。私は、回転寿司の時にレーンの上に人が乗っかるとは思いませんでした。最初の時に、お寿司が上にのったときは重かったけど、いっぱい練習をしたらあまり重くなりませんでした。私は、みんなががんばっているのを見て、私もがんばろうと思いました。」

5. 活動を振り返って

今回この「仮装大賞」に関わって、筆者の感じる「学級づくり」の意義をあげたい。

(1) 子どもの中での意識の広がり

子どもの作文にもあるように、子どもの意識の中で「みんな」という気持ちが生まれてきた。ぼく、私、だけではなく、「みんな」で行う「仮装大賞」であるという気持ちになり、私も、がんばらなければという気持ちになってくる子どもたちが多くでてきた。子ども同士の中での連帯感が生まれてきたと思われる。子どもたちは練習を行うたびにクラスとしての一体感がだんだんと高まってきた。練習の際にも、お互いにフォローしあったり、協力して進めていこうとする姿が多く見られた。それは、その後の学級経営、学年経営にも生きていくことになった。

(2) 子どもと教師との意識のつながり

自分たちのクラスでやりたいことを様々な諸問題があったにせよ、自分たちのクラスでやりたいことを成し遂げ、子どもたちの夢が叶ったということは、子どもたちにとって満足した点であると思われる。子どもたちにとって、筆者はどう写っていたのか、子どもと筆者の意識のつながりの中でしか分からないことであるが、子どもたちと気持ちの中でつながっていたということは確かなことである。教師と子どもたちとの強い信頼関係に上にあるようなことができたということも明らかなことである。

(3) 保護者とのかかわり

①文字を通した保護者とのかかわりである「学級通信」

学校と保護者との連携の場としての「学級通信」を基本的には1週間ごとに発行してきた。その中で、筆者の思い、子どもたちの様子を伝えていくことにより保護者からは、「どう動いているのか、わかる」という声を頂いた。「学級通信」の有効性などはさまざまなところで議論されているが、保護者との連携の場としての「学級通信」は非常に有効であったと感じている。筆者と保護者とのつながりが深まっていくことを「学級通信」を発行することによって身をもって感じる事ができた。

②保護者、教師、児童が協働した「ものづくり」

準備の段階から保護者の方にたくさんの支援を頂いた。振り返ってみれば準備段階の保護者の支援が、子どもたちにみんなが目標に向かっていく、という気持ちなることができた。子どもたちにとっては「僕たち、私たちだけがやっている」という意識ではなく、支

えてくれている保護者の準備段階等の姿を見ることによって「僕たち、私たちのためにたくさんの方が支えてくれている」という意識に変わってきていた。保護者の姿を子どもたちが見る、端的に言ってしまえば、裏方も表方もない、みんなでひとつをつくりあげるといふ、仮装大賞への「ものづくり」の精神によって、この仮装大賞の活動を通じて児童、筆者、保護者がひとつになることができた。

その点では仮装大賞を通じて、保護者とのつながりがさらに深まったように感じられる。

謝辞

今回「仮装大賞」に取り組むにあたっては子どもたちの願いを最大限叶えたいと筆者は願った。とはいっても、願いに向けて、最大限がんばったのは子どもたちである。子どもたちに感謝をしたい。また、今まで「仮装大賞」を進めていくにあたり、元2年2組の保護者の方には活動を非常に好意的に認めていただき、また最大限の協力もしていただき、筆者と子どもたちの活動を支えていただいた。この場をお借りして厚く感謝を申し上げます。

注

1) 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』（2008）文部科学省，p. 59

2) この番組の正式名称は、「欽ちゃん&香取慎吾の仮装大賞（日本テレビ系）」である。仮装に対してのアイディアの書類審査，地区予選，そしてテレビ局の審査を受け，審査を通過したものがテレビ番組に出演できるという視聴者参加型のテレビ番組である。この番組を見ていると，兄弟，家族，サークル団体での出場はいくつかあるが，クラスで参加出場するという例は数少ないと思われる。

筆者はクラスの児童と共に，「第82回「欽ちゃん&香取慎吾の仮装大賞」に8番「回転寿司」でテレビ番組出演した。回転寿司では，子どもたちが丸太送りの原理で上に乗ったお寿司に扮した子どもたちを回し，回転寿司の雰囲気表現しようと工夫した。

参考文献

新井清規，土井進（2008）「オオムラサキを中心とした総合的な学習における児童の成長」

信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究 No9， 61-70，

新井清規（2008）「郷土再発見の総合的な学習」財団法人下中研究財団， 2008 年報 4-12

東条小学校（責任編集，新井清規）（2009），『ホタルさんを育て守りたい』，子どもホタルレンジャー（平成21年度），環境大臣賞受賞

活動レポート http://www.env.go.jp/water/hotaranger/award/report/h21_1.pdf

（2010年10月19日 受付）

（2011年1月18日 受理）